

# こころせい

## 第36号

平成24年10月

発行 高知厚生病院  
広報委員会

### ◆ 高知厚生病院の理念・基本方針 ◆

#### 理 念

私たちは、安全かつ質の高い医療を提供し、皆さまに信頼される病院を目指します。

#### 基本方針

1. 患者さまとご家族、更に地域の皆さまの幸せのための医療を実践します。
2. 患者さまの権利を尊重し、真摯かつ温かい態度で接し、心と心が通い合う医療を実践します。
3. 自己研鑽に努め、更に発展向上を目指します。
4. 地域の医療機関や施設と連携し、効率的な医療を目指します。
5. 地球環境に留意し、災害への備えを怠りません。

## 過去・現在・未来

(その2)

副院長 山口 龍彦



#### □ 米国東部ホスピス視察旅行

日本でまだホスピスがめずらしかった頃のことを書きはじめて、今回が2回目となる。今回の話題は今から20年前のアメリカのホスピス視察旅行（前編）である。

1992年7月26日の午後成田を発ち、8月7日の午後成田に帰着した。13日間にわたるこの旅行が、私のその後の社会的役割を完全に変わってしまったと思う。

このツアーの企画者は先日101歳のお誕生日を迎えられた聖路加国際病院理事長日野原重明先生である。

#### □ 日野原先生との出会い

このツアーに同行させていただくことになった経緯（いきさつ）は、前年の暮れに日野原先生に手紙を書いたことが始まりである。日野原先生の毎年何冊か出されている本の愛読者であった私は、日野原先生がホスピスを創りたいと思っておられること、そして、その理想を実現するために世界各地のホスピスを視察して廻っておられることを知っていた。

私もホスピスという「がん患者のオアシス」があるならば、是非この目で見てみたいと思い、「次回、ご旅行に行かれる時は是非小生をお連れいただきたい」と書いたのである。大変ご多忙な先生であるから、地方の一医師（この頃は佐川町立高北病院整形外科に勤務していた）からお手紙を差し上げたとしても読んでくれるのは当分先のことであろうし、ひょっとすると読んでさえ下さらないかも知れないとさえ思っていてあまり期待していなかった。

ところが、驚いたことに数日後、真夜中に日野原先生ご本人から直接電話がかかってきてお許しをいただいたのである。

#### □ 旅行の概要

このツアーには、日野原先生を団長として、医師は私を含め3名、ナースは3名（内看護大学教授1名）、



ベス・イスラエル病院

日野原先生の創られた実験的な予防医療の拠点ライフプランニングセンターのボランティア8名、医師とナースの家族それぞれ1名の総勢17名が参加した。旅の7割がボストン、2割がニューヨーク、1割がその周辺での見学であった。

最初の訪問先であるボストンでは当時のベス・イスラエル病院（ハーバード大学の関連病院の一つで日本でも有名なMGHマサチューセッツ総合病院と競い合う存在。現在は合併してベス・イスラエル・ディーコネス医療センターとなっている）を拠点に、ボストン周辺の「みどころ」を素晴らしく練り上げられたプログラムで廻るこ

とができた。

ボストンは緑豊かな美しい町である。多くのノーベル医学賞受賞者を輩出しているベス・イスラエル病院自体の見学、病院ボランティアの働きについての見学、ボストン郊外の2家族用住宅をベースにした小さなホスピスの見学、エイズ専用ホスピスの見学、在宅ホスピスの見学、高齢者専用マンションの見学、未だ若かった頃のピリングス博士による緩和ケアの技術に関するレクチャーなど当時の日本人には未知の世界を知るためのプログラムをこなしつつ車窓からは美しい景色を堪能した。

日野原先生と当時のベス・イスラエル病院のラプキン院長は若い頃からの親友であり、お互いに尊敬しあっている関係であるので、この時も心から一行を歓迎して下さり、情報の的確な収集に関しても細かく便宜を図って下さったのである。

ホスピスのようなデリケートな問題を扱う施設の見学には、見学者と施設間の信頼関係が不可欠である。国際内科学会の会長職にもあった日野原先生の海外における信用は絶大で、なおかつベス・イスラエル病院も地元の人たちに最も信頼されている病院の一つである。日野原先生に率いられ、ベス・イスラエル病院のマークが輝く小型バスで訪れた先では、どこでも大変丁寧に扱って下さり、貴重な体験を数多くさせていただいた。



ベス・イスラエル病院のマークが輝く小型バス

## □ 朝日俊彦先生とのご縁

この旅行で一番の収穫は朝日俊彦先生とご一緒できたことである。香川県立中央病院の泌尿器科部長としてがん診療の第一線に身を置かれている朝日先生は、この頃すでに10年以上も前から100%がん告知を達成していた。

朝日先生は、1988年と1990年に催行された日野原先生のホスピス見学旅行（オーストラリアとカナダ）にも随行されており、今回が3度目のツアーであるとのこと。海外では、どこであっててもがん告知は当たり前であり、がんであることを本人に隠したまま体を傷める可能性がある治療を平気で行なっている当時の日本の医療の在り方には批判的であった。

当時は日本でもやっとがん告知の必要性が議論されるようになってきたところであり、朝日先生はその先駆者であった。「今、初めての本を書いているんや。今年中に出そうと思うてる。ホスピスとがん告知の本なんや。」「そうですか。楽しみですすね。本の題名は何ですか。」「『笑って死ぬために』にしようと思ってる。」「英語名は『To Die Laughing』ですか」「いや、『To Die Smiling』ちゃうか」朝日先生のお顔を思い出すとき、笑顔しか思い出せない。実際、怒った顔を見たことがないのだから仕方がない。

旅先のホテルは日野原先生が個室に入られたほかは、2人一組でツインの部屋に宿泊したので朝日先生と一緒に11泊したことになる。もちろん、旅先で実際に見聞したことの重要性はいうまでもないことではあるが、それにも増して朝日先生の知識や考え方を吸収できる機会を多く持つことができたことは幸いであった。日本へ帰ってからわからないことがあるとお電話させていただいたし、高知にも何度もきて

いただいでご講演をお願いし、高知のホスピス啓発活動に大きな役割を担っていただいた。この旅行で私はホスピスの直接の師を得ることができたのである。

高知厚生病院にホスピス病棟ができたとき、朝日先生より3つの言葉をいただいた。「心穏やかに 満足して 感謝のうちに」この3つの言葉は、今でも当院ホスピスの向かうべき方角を指し示している。

朝日先生は3年前の暮れに亡くなられた。棺の中で満面の笑みを湛えておられた朝日先生を忘れることはできない。

## □ チルトンハウス（ホーム・ホスピス）

ボストンからバスで20分ぐらいのケンブリッジの町にあるホーム・ホスピスである。ホスピスというと日本では病院をイメージすると思うが、ここはそうではなかった。このホスピスは木造2階建ての2所帯住宅を改装してできている。見た目は周囲の民家と何ら変わることがない。少し広めの芝生の庭が附属しているが、アメリカの民家によくあるやつで、幼児が走り回るのにはちょうど良い程度のものである。患者用の居室は5つの家庭的な雰囲気ホスピスである。



チルトンハウス

この施設の目的は、家庭にとどまることはできないが、病院には入院する必要がない人に家庭の温かさと、安心感を提供することである。医療は外付けであり、訪問看護、訪問診療が提供される。ここのマネージャーは、ポールさんといって、神学博士の称号を持ちスピリチュアルなケアができる人であった。

私たち一行はここに入所している人に会って話をすることができた。その時のことを同行したボランティアである米沢宣子さんが「教育医療」誌Vol19.No2.にレポートして下さっているので転記させていただく。



チルトンハウス庭にて

『脇の小道から裏に廻ると、明るい芝生の庭で一人の女性が昼食をとっていらっしゃいました。パトリシアさんというグリーンのタンクトップにチェックのショートパンツ、笑顔のとても素晴らしい方でした。まさか、彼女が肺がんなんて。しかも後2～3ヶ月の命だなんて信じられません。お部屋から伸びている酸素吸入のチューブを除けば、元気はつらつな一婦人にしか見えません。この女性が自分の心境を話して下さいました。』

「ホスピスに入ったのは、夫に消防士としての仕事をそのまま続けて欲しかったし、娘達にも負担をかけたくなかったから。最初の2ヶ月は病院で治療を受けたけど、副作用が苦しくて耐えられませんでした。ホーム・ホスピスに移ることを誘われた時は病院から離れることの不安が大きかった。けれども、チルトンハウスに入った夜、一人のナースが足を黙ってさずってくれたのね。その時、ああもう大丈夫だと感じました。」

今は、朝、雀の声で目が覚める（彼女は部屋の窓に餌台を作っている）ことや亡くなってしまわれた方が遺された草花の手入れをすることが楽しみです。週末には夫とドライブをして潮の香りや森の緑を楽しんでいます。酸素ボンベは2時間分しかないけれど、時の経つのを忘れてしまうこともよくあります。」

喜太郎の音楽が大好きという彼女の部屋には、ヴィオリンを奏でる彼女の写真が飾ってありました。

チルトンハウスのマネージャー、ポール氏は残りわずかと宣告された患者も、チルトンハウスに来ると何ヶ月も延命するケースが多いと話していました。

パトリシアさん。明日の朝も雀の声で目覚めて下さいね。』

日本では、ホスピス＝緩和ケア病棟が一般的なので、このようなホーム・ホスピスという形態はあまり聞かないようだ。20年前のボストン郊外にあったホーム・ホスピスは現在の日本から考えても先進的だと思う。「チルトンハウス」が当院の近くにあればいいと思いませんか？



# 緩和ケアレポート

## 緩和ケアレポート①

緩和ケア病棟 主任 橋田 ユリ

### リレーフォーライフに参加して



今年も10月6日(土)、7日(日)と行われたリレーフォーライフに、高知厚生病院でチームを結成し参加させていただきました。

普段からあまり歩くことが無い私は、去年はリレーフォーライフが始まる1週間前から自宅周辺を1時間くらい歩いていました。今年も「歩かなきゃ」と思いつつ歩くことができず、当日は歩くときに足が痛くなり、続けて歩くのは30分が限界でした。それでも2、3日後に出てくると恐れていた筋肉痛も出現せずホッとしています。



日の出を待つミナリエババック  
幻想的な世界が広がります

今年初めて厚生病院チームで24時間参加で歩くことになり、その歩く方のエネルギー源として<おでん>を準備することになりました。…が、そのおでん作りが大変でした。前日、栄養課から借りてきた大鍋が緩和ケア病棟のIHコンロに合わないというアクシデント。急遽、小鍋で何回かに分けての仕込みとなりました。50人分の準備なので、かなりの手間と時間でしたが、当日食べた方々が「美味しい」と言ってくださり、やった甲斐があったなと嬉しく思いました。

準備など何かと大変でしたが、皆さんの協力のもと、無事に終了できました。参加して下さった方、寄付して下さった方、また、当日代わりに勤務して下さいました方、みなさん本当にありがとうございました。お疲れ様でした。



大久保看護師のルーク君も一緒に歩いてくれました♪



ファイナルウォーク  
24時間お疲れ様でした！！

## 緩和ケアレポート②

医療ソーシャルワーカー 山下 梓

### ホスピス緩和ケア説明会



「世界ホスピス緩和ケアデー (World Hospice & Palliative Care Day)」を最終日とした一週間を「ホスピス緩和ケア週間」とし、ポスターの掲示及びセミナーや見学会の実施などを通して、緩和ケアの普及啓発活動に取り組んでいます。

当院では、10月10日(水)14時より「ホスピス緩和ケア説明会」を開催しました。ホスピス緩和ケア、病棟におけるケアや在宅ケ



アについて各専門職より説明があった後、緩和ケア病棟のコンサートに参加されました。参加者の皆様は、患者さんやご家族と一緒に時間を過ごされる中で、一般病棟では感じる事ができない、あたたかな時間がゆっくりと流れる印象を受けていただいたようです。

つらい現実と向き合わざるを得ない毎日ではありますが、心地良い歌と音楽が流れる中、心穏やかになれるひとときでした。



### 祝 100 歳!! 高知市岡崎市長来院!!



今年度中に 100 歳を迎える方々に、高知市の岡崎誠也市長の来訪がありました。内閣総理大臣からの、祝状と記念品（銀杯）、高知市からの祝状と記念品をいただきました。

**100 歳のお誕生日おめでとうございます!!**



### 通所リハビリ敬老会

介護福祉士 土居 奈津

9 月 20 日（木）通所リハビリで敬老会を行いました。  
今年の敬老会はスタッフとの出し物として「ラインダンス」・寸劇を加えた「しばてん踊り」と全員参加の「お楽しみ抽選会」を行いました。

中でも「しばてん踊り」は利用者の皆様も馴染みがあったようで一緒に手拍子をされたり歌を歌われる方もいらっしゃり、又スタッフも利用者様も一緒になって笑い、楽しむ事が出来たように思います。普段ではあまり見られない利用者様のとびきりの笑顔を目の前にすると、私たちスタッフもとてもうれしくて心が温かい気持ちになり、いつまでもお元気で通所に来て頂きたいと強く思いました。

また、後日になっても「敬老会、楽しかったね。また見たいね。」と声をかけて下さる利用者様もいらっしゃり、今後の行事も皆様に喜んでいただけるように企画していきたいと思いました。



### 高須保育園 敬老運動会参加

相談員 乾 亜矢



10 月 10 日に高須保育園の敬老運動会のご招待を受け、通所リハビリこうせいの数名の利用者様と参加させて頂くことが出来ました。0 歳から 5 歳までの子供たちの一生懸命の姿に、たくさん拍手し、応援し、感動してきました。又、「いつも地域で、私たちを見守ってくれてありがとう」と子供たちが作ったレイをプレゼントしてくれた時には握手しながら、涙ぐむ場面もありました。素敵な一時となりました。

## 地域連携・緩和ケア支援室より



「地域医療連携室」、「緩和ケア支援室」が  
**名称変更**を行いました。

以前は、それぞれの名称で業務していましたが、  
現在は『**地域連携・緩和ケア支援室**』として、名称  
を変更しております。今後とも、地域の医療機関と連携し、地域の皆様  
がより良い医療が受けられるよう支援していきたいと思っております。  
これからもどうぞよろしくお願いいたします。

**地域連携・緩和ケア支援室**

室長 看護師 岡崎 奈美

医療ソーシャルワーカー

乾 亜矢、山下 梓

## 実習生受け入れのご報告

### 社会福祉士相談援助実習

高知県立大学社会福祉学部 3 回生 濱田優知さん、四國友理さん

各 4 週間、相談者の思いに寄り添える社会福祉士になれるよう、患者さんとの面接を  
行いながら、頑張ってお実習をされました。患者さんの残された限りある時間を共有で  
きたことは、彼女たちの宝物となりました。ご協力いただいた皆様、本当にありがとうございました。

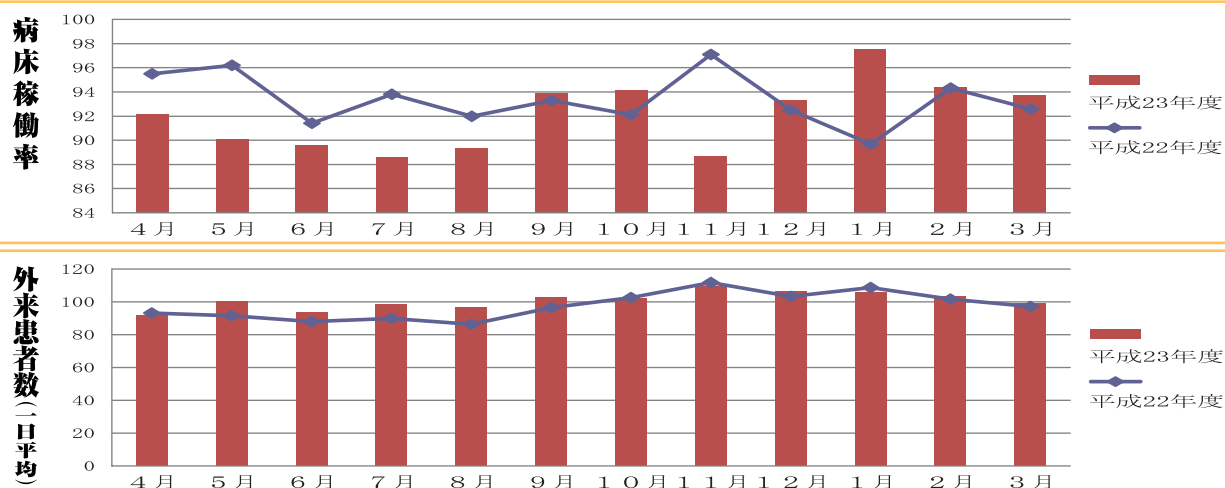


### 社会福祉士見学実習

高知県立大学社会福祉学部 2 回生、3 回生 計 4 名

4 名ともに初めての医療機関の見学実習で、とても緊張されていましたが、たくさんの学びを得て帰ら  
れました。

## 診療実績報告（平成 22・23 年度）



当院は  
平成15年9月22日より  
日本医療機能評価機構  
認定病院となっております。



◆ 特定非営利法人  
日本緩和医療学  
会より認定研修  
施設として認定  
されました



◆ 厚生労働省より  
医師の卒後臨  
床研修施設の  
認定を受けまし  
た

## 編集後記

爽やかな秋晴れが続いています。どこからともなく、  
金木犀の香りがするとほっとした気持ちになりますね。  
皆さんのほっとするスポットなど教えてください！！